



シンポジウム「オペラ、劇場、地域——日独比較からみえてくるもの」

2017年3月25日（土）13時～17時

法政大学市ヶ谷キャンパス（東京都千代田区富士見2-17-1） ボアソナードタワー25階会議室C

発表1 辻英史（法政大学） 劇場圏とは何か

発表2 江藤光紀（筑波大学） ドイツ社会と劇場

発表3 石田麻子（昭和音楽大学オペラ研究所、ゲストスピーカー）世界のオペラの動向と日本

発表4 関根礼子（昭和音楽大学オペラ研究所、ゲストスピーカー）日本の市民オペラ

発表5 城多努（広島市立大） 広島オペラ活動の現状

ラウンドテーブル 劇場圏からみえてくるもの

ドイツはオペラや演劇、ダンスの専門スタッフを擁した劇場が中規模以上の都市には必ず存在する世界にも類をみない劇場大国である。他方、日本の舞台芸術においても箱もの行政と言われた90年代以前のあり方を脱却し、人やコンテンツを継続的に育て地域文化を醸成していこうという取り組みが活発になってきた。しかしながら劇場の仕事が文化行政やコミュニティとどうつながっていくか、という点については、いまだ包括的な理論的枠組みは存在しないといっている。

科学研究費助成事業「公共圏における劇場の役割—ドイツの選択、日本の針路」(2014-2016、課題番号26284029)では劇場圏というタームを軸に、劇場の活動を地域コミュニティや行財政も含めた総合的な観点から理解する方法を模索してきた。その成果報告である本シンポジウム「オペラ、劇場、地域——日独比較からみえてくるもの」では、三名の研究メンバーそれぞれの発表に加え、お二方のゲストスピーカーをお招きして、舞台芸術の中でも最も多くの要素が関係しあうオペラを素材に劇場大国ドイツのあり方を探り、日本の舞台芸術の特性やコンテンツの育成の可能性を考察する。 問合せ先：江藤光紀 [eto.mitsunori.gf\(a\)u.tsukuba.ac.jp](mailto:eto.mitsunori.gf(a)u.tsukuba.ac.jp)